

法然と病氣

鈴木 成 元

一

近來法然傳に關する研究が進み、多くの掉論が發表されて學會を賑わしているが、法然の病氣そのものについての論文はまだ管見しない。法然の傳記に記載されている病氣の記事は、建久八年（一一九七）から翌年にかけての風邪、元久元年（一二〇四）の瘧病、建暦元年（一二一一）から翌年にかけての老病、など三件に過ぎない。また數多くある法然の語録をはじめ、弟子達の語録にも極めて少ない。だから一つの論文という形で取りあげることが不可能であつたかもしれない。いや事實上、病氣の内容・状態についてならば、書きたくとも書けるはずがない。もしそれができたとしても、病氣そのものについての論文ならば、醫學的な論文になり、人文科學系の論文としては異色であるに相違ない。

私がここで取りあげる「法然と病氣」の問題も、決して病氣の内容とか状態を語るものではない。法然の病氣が歴史的

にどのような價值をもつものであるか、という點に焦點を絞つて考えてみたいと思う。

なお、法然の傳記は一々その名をあげるとは煩わしいので、以下醍醐本（法然上人傳記）・傳法繪（本朝祖師傳記繪詞）・弘願本（法然聖人繪）・近衛本（法然上人繪詞）・九卷傳（法然上人傳記）・十卷傳（法然上人傳）・四十八卷傳（法然上人行狀畫圖）と略稱した。

二

法然の傳記の上で、最初に見える病氣の記事は建久八年である（『四十八卷傳』『九卷傳』『醍醐本』）。このときは「いさゝかなやみたまふ事」とか「不例のこと」とかあつて、どんな病氣であつたのかわからない。もちろん暮近くであつたらうと推察はされるが、何月であつたかもしつきりしない。けれども、この病氣は弟子達をはじめとし、九條兼實にも大きなショックを與えたところをみれば、かなりの大病であつたと

いつてよい。しかし建久八年の暮までには平愈した。『四十八卷傳』によると、建久九年の正月一日から草庵にこもつて別時をはじめ、別請には行かなかつたとある。そこで兼實は藤右衛門尉重經を使として、法然に『選擇集』の撰述を要請した、というのである。なるほど普通にとればもつともな記述である。しかし考えてみると、法然は正月に別時念佛を行うのが恒例であつた（『醍醐本』『西方指南抄』『三昧發得記』『九卷傳』『十卷傳』『元亨釋書』等）。この年も例年通り別時を始めたのであろう。別時を行うぐらいであるから『四十八卷傳』にも記すように平愈したと考えてもよいと思う。別時中に『選擇集』の撰述を要請されてもできないことはいうまでもない。だから兼實の使者重經が法然を尋ねて要請するのはいつでもよいわけではあるが、時間的にはもう少し後の方がよいように思う。そして法然の病氣が全快すれば、それほど急ぐ必要もないはずである。

ところが『和語燈錄』所收、建久九年と思われる四月二十六日付で、法然が津戸三郎に出した手紙によると、法然はよく風邪をひいたらしい。この年も正月早々に風邪をひいた。いつもの風邪と思ひ大した氣にもしないで五十日間の別時をつとめた。ところがそれがこじれて大病になつてしまつた。二月の十日頃から口がかわくようになり、二十日頃にはどうしたらよいのかわからなくなつてしまつた。醫者にもみても

らい、大切に治療につとめた。日本の薬はいうまでもなく、支那（唐）の薬まで用い、できるかぎりの手當をしたが思ふように行かなかつた。しかし近頃はほんの少しづつよくなつてきたようである。と四月になつてもまだ苦しんでいた様子がかかる。そして最後に、自分の病氣のためにわざわざ見舞に上洛しなくともよい、おたがいに念佛して往生するのが本望だといつている。

法然の病氣について詳細に語つているものはこの手紙一通であるが、この時の状態をよく語りつくしていると思う。それにしても法然の病氣は風邪であつた。それがこじれて五十日以上も苦しんだ。今なら肺炎といふところであらうか。

この病氣の結果書かれたものであろうが、法然は建久九年四月八日付で「没後制誠」を書いた。これは自分の死後どのようにに葬儀追善をするか、また房舎資具などの財産處理について遺された遺言状である。津戸三郎につかわした手紙にもその影は見えるが、このごろにおける法然の心境は、自分ももうこれまでかもしれない。何時死んでも心残りのないように、また弟子達のいざこざのないように、生存中にするにはしておこう、そういう心境であつたと思われる。そこで信空・感西・證空・圓親・長尊・感聖・良清の七人に私有財産を領ち與え、いろいろの誠をして後事を依頼するという状態にあつた。

このような報はすぐに九條兼實にとどいたに相違ない。そこで兼實は淨土の教義を残してくれるように要請したのであろう。けれども考えてみると、毎日法然と起居をともにしていた弟子達にしても、『選擇集』があるかないとでは大きな相違である。だから當然弟子達からの要請もあつたに相違ない。兼實よりも弟子の方が深刻であるだけに懇請を重ねたものと想像される。一方法然にしても遺言を書くような状態であるから、何とか形にして淨土の教義を残したいと思うだろうし、ぼつぼつ異義を稱える弟子達がでてきているので、當然残さなければならぬと考えていたことであろう。こうして法然の大病はいろいろな要求をもたらし、『選擇集』を完成させて行つたのである。

三

文獻に出て来る第二の記事は、元久元年の瘧病に關するものである。昨年四月、奈良興善寺の阿彌陀佛立像の胎内から貴重な古文書が発見された。これは早速堀池春峰氏・小川龍彦氏など多くの人々により紹介され、とりわけ堀池氏の『佛教史學』に發表された「興善寺藏・法然聖人等消息並に念佛結縁交名狀に就いて」という論文は話題を生んだ。

堀池氏の論文は、胎内から出た全文書をあげて詳しく考證したものである。だからここで文書についての再説ははぶく

が、問題は、発見された文書が法然の眞筆であるかどうかという點にある。小川龍彦氏は『中外日報』などで眞筆を主張しているが、堀池氏の論文では、解説はしても眞筆とまでは斷定を下していないようである。法然の眞筆と從來傳えられているものは、廬山寺所藏の『選擇集』に書かれた二十一字ということになつているが、學問的に認められているものは、何もない。一番確實なものは、二尊院所藏の「七ヶ條制誠」にある花押のみである。このように比較的對象がないので、速斷は難かしいであろう。私も法然の眞筆といわれている興善寺文書が眞筆かどうかということは疑問とするところであるが、全ての點で鎌倉時代を下らないものであるとはいえないと思う。それにしても中に書いてある内容は、法然のものとみてさしつかえないといえる。また、これらと一緒にある證空や欣西の書狀は、そのまま認めてもよいと思う。

それはそれとして、堀池氏が指摘しているように、興善寺文書には法然の病氣に關する記事がある。法然から正行房に宛てたと思われる斷片には、手紙と見舞品の禮をのべ、今のところ病氣は心配ないから、夏でも過ぎたら上落しろといっている。しかし、この手紙の上では病名はわからない。ただ從來『四十八卷傳』に一ヶ所しかでていなかった正行房が、津戸三郎などと同様に、師法然のために再三の見舞狀や小袖などの見舞品をとどけていることに注意をしなければならな

い。法然も親鸞や日蓮などと同様に、弟子達から寄進を受けていたことがわかる。

二月某日付で正行房に宛てた證空の手紙には、法然の病氣が少し起つて来たがそうそう心配するほどではない。けれども生身の體であるからいつどんなことがおこらないともかぎらない。できれば早く上落した方がよい。法然の病氣について淨利房は嘆いているが、人々には知らせないでほしい。眞觀房（感西）の時も急であつたので可愛そうなことをしてしまつた、などと書いてある。

この手紙も斷片で二月のものか十二月の十が切れたものは別としても年號はわからない。堀池氏は『一期物語』『九卷傳』『十卷傳』などを引き、法然晩年の持病である「おこり」を指すものであり、元久元年頃と推定している。傳記に見える法然の瘧病は、『近衛本』『九卷傳』『傳法繪』には元久元年八月とあり、『十卷傳』には元久二年八月と一ヶ年ずれている。また『知恩傳』『醍醐本』『一期物語』には或時として年號はない。

いずれにしてもその内容は、法然が瘧病を患つたとき、兼實が心配し、善導の繪をかけ、聖覺が導師となつて佛事を營んだところ、法然はもちろん、聖覺自身の瘧病も一緒になり、奇特なことだと世間では語りあつた、という大同少異のものである。『九卷傳』は法然のわずらつた場所を二階堂と

し、小松殿に移して供養したとある。そして末代衆生の不審を除くためにわざとされたといつている。法然が瘧病をわずらつたことは事實であろうが、『九卷傳』のいうわざとされたという記事は疑がわなければならぬ。これは後に「三心を具足した念者は病氣をしない」というようにまで發展した教義の一端を示すもので、うまく脚色したものとみなすことができるであろう。

それにしても「出で給う」という表現からすれば、これ以前にも瘧病を患つていたことがわかる。何時からかは明らかでないが、元久元年以前にあり、元久元年の八月、北白河の二階堂に赴いたとき出たのであろう。このとき弟子達は念佛を稱えたり、結縁をしておきたい、などといつて馳せ參じ騒いだのであるが、佛事を行つて全快したと諸傳記では記述している。

十二月四日付の證空書狀にも病名はでていない。しかし、今のところは異状はないけれども、向寒の折非常に心配だといつている。またこのような状態であるから、淨利房にも手紙は出してないが、そのうち上落するだろうといい、貴殿（正行房）もあいたいから上落しろといつている。寒さが厳しくなると心配になる病氣といえは、「風邪」とか「肺炎」「ぜんそく」などいろいろとあげられるが、「おこる」という表現からすれば瘧病とみてもよいであろう。

胎内文書でもつとも興味あるものは、十二月四日付の欣西書状である。

所の、ちはなに事も候はぬに候、佐は候へとも、ひしりのをんハうハ、れいのさむけニ候、あ日にはすこし津々々ませ給ひ候に候、もしと志あげ候ひては、をこりやせさせ給ひ候はんすらん、所の時は「いそぎく申候へく候、所のようにさせ給ひて候へ、たう志はすこしも所のけはおはしまし候す」、さしたる事候ハす春はたゝのほらせ給ひ候へかし、いくはく可はをハしまし候へきと、あはれに於ほへ候に、かつはくたゝ人ともおほへさせ給ひ候」はむ事のあさましく候也、又それにはなに事か」をハしまし候、おほつかなく候、又なみたなかし」くたらせ給ひて、御事をよによるこはれておハし候」事も、とく申やるかたなく候ものか那、又「かう入道すてニ往生して候也、又一てうの」淨心房けふあすとみへ候、となりのたからを」か所へてすき候なんするやらん、かまへて」はけませ給ひ候へ、つねには心にまかせさせ給ひ候へからず候、又はひこうも申候やうニ」このをんハうのをんた免、いかに候事なにとも」所んし候へとも、思ひよるかたの候はねハ、ひ」 「候ひつるか、にわかにかふかく所んする事候ひて、をんた免ニ佛を津くりまいらせていきのこりて候」は、かたみとおもひまいらせ候らんとてハしめて候、れう」せちすこしニてもたひ候へ、かならずくハしくハ」このをんハう申候へく候、（後略）

十二月四日

欣西

この中で欣西は、法然の病氣は例の寒氣で、少しずつ重くなつて行くようである。年でもあけたら「おこり」になるのではなからうか、その時には急いで通知するからすぐ上京できる用意をしておけ、といつてゐる。また欣西はにわかには感ずるところがあつて法然のために佛像を作りはじめた。そしてもし自分が法然よりも長生きしたら、この佛像を法然の形見にしようと思ひ、だから作佛料に少し金を寄附しろ、といひ、「かう入道」はすでに入寂し、一條の「淨心房」も今日か明日は入寂するらしい、など、法然の病氣を心配してゐることには變りないが、門弟間の緊密な消息をも傳え、それぞれ生命の無常さを傳えている點に注意しなければならぬ。

以上四通の文書をあげて説明した通り、興善寺文書に出てくる法然の病氣は瘧病とみてよいであらう。そして、その年代も元久元年前後とみてよいように思われる。しかし注意を要することは、法然の病氣をめぐつて弟子達はお互いに連絡を取り、絶えず見舞におもむき、見舞の品々をどけたのはいうまでもなく、見舞状を出して力ずけるというように、一致團結して師法然の看護につとめ病状を案じてゐることである。人々に知らせるなというのも、病状を案じての思いやりであらう。それにしても現實には、傳記にあるような佛事の興行は見えない。そのような氣持であつたことはわかるが、そして精神的には佛の慈悲を頼んだことであらうが、實際に

はあらゆる薬に頼り十分な滋養をとつて静養につとめたのである。「七ヶ條起請文」を山門に送つた彈壓殿しい最中に、弟子達はこのような行動をとつていたのである。そして法然對弟子という一人對一人の文通ではなく、法然對弟子、弟子對弟子、と一人對數人の文通でよりよい情報をキャッチし、法然の形見まで作るといふ状態なのである。ここには從來全く知られなかつた、人間の心と心のふれあひが感じられる。そして弟子達が眞から傾頭した法然像を大きく浮かび上げることがができる。

四

第三の記事は最後の臨終、いわゆる建曆二年正月のものである。ここでは老病としているだけで、風邪とも瘧病ともしていない。八十歳の高齢から考えて、枯木が倒れるように老衰して行つた状態を思いうかべるのであるが、『九卷傳』『傳法繪』などの記述は、「凡此兩三年」耳も聞えず、目も不自由だつたといつてゐる。とすると、この老衰は攝津の勝尾寺にいたころから起つていたようである。そして、「前後不覺」になつていたとあるから、軽い脳軟化症のような状態であつたと思われる。その上食欲もなくなつたというから、衰弱が加わつて行つたことはいうまでもない。このような状態にある法然を前にして、弟子達は一生懸命看病護念につとめたこと

法然と病氣（鈴 木）

はいうまでもない。

こうして法然を中心に、緊密な連絡をとり圓滿に和合していた教團ではあつたが、法然の入寂後は多くの流派に分かれて行く結果になつた。それは念佛者に對する彈壓もさることながら、自分こそ法然の眞の後繼者であるという自負が、派閥争いと化して行つたことはいうまでもない。

五

數多く現存する法然の「繪卷」をはじめ、「畫像」や「木像」などからうける健康状態は、デブブリと肥り、どことなく大らかな感じを興え、一見丈夫そうに思われる。またこれらが原因となり、後世脚色されたのであらうと思われる。が、大部分のものは勝れた健康であつたように記している。しかし語録の所々には健康に對する言葉が用いられ、總合して考えると、實際には潜病質で、見かけよりは弱い體質ではなかつたかと思われる。

それはともかくとして、歴史學上における個人的な病氣などという記事は、決して價値のあるものではない。しかし法然の病氣は、彼の傳記を考える上において、いやそればかりではなく、法然教團の上において、大きな價値をもつていたといわなければならない。